

JTBグループ労働組合連合会 第20回震災復興支援活動レポート

ジェイティービーサンアンドサン西日本労働組合

宮野 華奈

日 時：2015年10月17日（土）～10月18日（日）

場 所：福島県南相馬市

参加人数：26名

1. 活動参加にあたって

「東北での復興支援ボランティア活動がある。」入社して間もないころ、組合のひとつの活動内容としてこの取り組みを知り、自らの意志で参加することになりました。当初は、「以前から現地の現状が気にかかっていたから」「何か自分にできることを」といった感情を持ちつつも、JTBグループ・会社をもっと知りたい、知り合いを増やしたいといった、ボランティア活動以外への気持ちも強くありました。正直なところ、今回で第20回目を迎えた復興支援活動のきっかけ「2011年3月11日東北地方太平洋沖地震」があった当時、学生だった私は目先のことに必死で、被害を知りながらも募金をしたかさえ定かではありません。

現在においても、被災地のことを日々気にかけていたとは胸を張って言うことはできず、私個人の中では既に過去のこととして捉えてしまっていました。しかし、現在の南相馬市で実際に見聞きし、活動したことから気付かされるものが多くあり、私自身にとっても大変良い機会でありました。



2. 活動日当日・内容について

活動初日10月17日の朝6時に集合・出発し、宮城県仙台市からバスで片道2時間をかけて福島県南相馬市に到着しました。バスを降りた場所は私が想像していたものとは少し違い、「復興は進んでいる」というのが第一印象としてありました。降り立った場所を見渡す限り、すでに瓦礫は撤去され、建物もあり、緑豊かな景色が広がっているように感じ、どこかののどかな場所に来たという印象だったのです。そこで震災当時から4年という月日が経過していることを改めて実感しました。これまでにたくさんの方々が活動に参加し、南相馬市を元通りにすべく尽力してきた結果が見受けられ、今更参加している自分に少し後ろめたさを感じました。しかし、南相馬市

ボランティア活動センター長である松本さんのお話によれば、手の行き届いていないところは未だに多く存在し、震災直後に南相馬市を離れた人たちの多くは帰ってきていないという現状があるそうです。松本さんをはじめとしたボランティアセンターの方々、外に出ざるを得なかった方々がいつでも帰ってこられるように日々活動に取り組んでいるということでした。

当日の役割箇所の割り振りを合図に、団体それぞれの活動が始まりました。私たちの担当場所はボランティアセンターからバスで数分移動したところでした。そこは、通りすぎる人も建物も少なく、何も無い平地と草木がうっそうとした土地が目の前にありました。私たちの活動日2日間の主な役割は草刈りで、根付いて生い茂った草木をひたすらに伐採するというものでした。作業としては単純なものではありましたが、地面に張り付きドロドロになる作業は大変体力を必要とするものでもありました。量としても多く、大人26名が2日をかけても担当エリアを完了したとは言えないほどでした。

活動中、当時の情景を思い描かせるものを見つけました。

私たちが担当していたエリアは海から離れた山であり、海水の匂いさえも伝わってこない場所であったにも関わらず、草木の伐採を進めていくと、山の斜面から海水によって流されてきたであろう袋や空き缶のゴミに混ざり、貝殻がでてきました。震災復興活動の一環としての草刈りが、ただの草刈りとなりつつあった状況の中でハッとさせられました。改めて、後ろにあった海を見るとやはり遠くに広がっており、津波の威力を実感しました。と同時に、当時の恐怖は想像しきれないものだったと思います。



3. 今回の活動を通じて

この2日間を通して、震災から4年経っていながらも以前の生活を取り戻せていない現地の方々がいることを知り、「まだ元通りではない」という現実と、「まだまだできることはたくさんある」という感情が芽生えました。また、今回参加したことで私たちが日々どれだけ支え合って生きているのかを改めて実感しました。活動を終えた私たちに、「どれでも取っていいよ!」とお家の前に生る柿を下さる方や、コーヒーの差し入れをしてくださる方等がおり、人の温かさに触れることができました。さらに、今回の活動には遠方の方々をはじめ、学生の団体や日本に住む外国の方の団体も参加されていました。



参加者全体でそれぞれ参加の頻度は異なり、ひとりひとりの力は小さくとも、南相馬市ボランティア活動センターのスローガン「できる人が、できる時に、できる事をする」のように、今回参加できた人たちが協力し合えたことで、また次につなげることができたのではないかと思います。

今回私自身、現地でのボランティア活動に参加するのは初めてでしたが、普段は伝わってこない情報や、実際に参加したことで得るものが多くあり、復興活動に関わることができたことを嬉しく思います。今後もこの気持ちを忘れず、小さくとも私ができることを見つけていきたいと感じました。